

江戸中期 唐話を導いた岡嶋冠山

はなしことば

太田 哲郎

一 長崎町人もかつてブローケン唐話を使っていたのでは
中国語を勉強している私にとって、四百年昔の長崎の歴史を想像するのは楽しい。

当時の長崎町人は異国語をどう操っていたのだろうか。
唐船との貿易を長崎港に限るとされたのは、寛永十二年(一六三五)からで、従前は相対貿易の形を踏襲していたが、だんだん奉行所の管理が厳しくなり、個人対個人の商取引が出来なくなった。規制が緩やかなころは、商売の駆け引きを中国語混じりでやり合ったであろう。さて、滞在する唐船の人達の宿をどこに決めるかなど、市内の町々は民宿の集まりで唐船宿になろうと争った。長崎の街中が貿易商社の町といえなくもない。当然長崎町人の生活語には中国語を切り離すことができなかったはずである。長崎娘が唐人と懇ろになり唐人と交わす陸言も多く聞かれた。

江戸幕府の長崎支配の中心は長崎奉行であり、元禄十一年(二六九八)に唐通事会所が設けられ、(注：宝暦元年(二七五二)長崎唐人の研究・李献璋題いよいよ業務の管理体制が整えられると唐通事は貿易業務の中枢部に食い込み、対外交渉の第一線で活躍する職能集団となった。書く・読む・話すすべて地役人である唐通事に委ねられ、これより九年前に唐人屋敷が出来たこともあって、もはや庶民は唐人と直接ふれ合う機会は閉ざされてしまった。(遊女や唐人屋敷番方などは別にしても…) 唐通事の起源は、慶長八年(二六〇三)(注：慶長九年説も)当時の奉行・小笠原一菴が住宅唐人・馮六に通



岡嶋冠山著書「唐話纂要」

て商売でもしたい」。願いが聞き届けられる。

宝永元年(一七〇四) 三二歳。上京。秋頃書肆・林義端と会い『英烈・水滸二伝』の訳解を依頼される。以降各版元から訳解の注文が来る。(冠山が全訳したわけではなく、他にも訳者がいたという説もある)
宝永三年(一七〇六) 三四歳。京橋口定番を努めていた足利藩主・戸田大隅守に招かれ京から江戸へ。
宝永五年(一七〇八) 三十六歳。江戸で荻生徂来を知る。
宝永六年(一七〇九) 三十七歳。戸田氏の元を離れて難波に帰り、唐音の講説を生業とする。

宝永七年(一七一〇) 三十八歳。再度江戸へ出て唐音を教え諸家と交流する。
正徳元年(一七一一) 三九歳。朝鮮通信使が来朝。大学頭・林整宇の門に入り、弟子として通信使との対応や会に同席し、筆談する。一行が尾張藩の賓館に滞在した折りは、書記・朝比奈玄洲からの用命で、冠山は申維翰(八回目の使節)に付き添って江戸入りした。十月、徂来の塾・護(カン)萱と同義園に「訳社」が結成され、岡嶋が唐話の指導に当たった。

享保元年(一七二六) 四四歳。九月『唐話纂要』五巻五册(初版)刊行。
享保四年(一七二〇) 四七歳。中国語訳『太平記演義』五巻五册を刊行。
享保六年(一七二二) 四九歳。長崎へ帰郷。
以降、唐話に関する会話テキスト類の書籍を多数著す。
享保十三年(一七二九) 五六歳。正月三日、大坂で没す。慧日山東福寺に葬られる。改葬の説があるが未詳。

(※以上の年譜は若木太一氏の資料にもとづくが、記事が詳細にわたるため途中を割愛させていただきました)

三 冠山は「唐譯便覧」、「唐話辞書」、「雅俗類語」、「太平記演義」などを著している。

四 郷土には馴染みが薄かった冠山

彼は生地が長崎でも若くしてこの地を離れ、活躍の舞台を京・大坂・江戸に移し、大坂に骨を埋めた。享保六年(一七二二)一時帰郷しているが、その期間や目的がつまびらかでない。

参考資料：若木太一・放送大学公開講座資料 共著『辞書遊歩』九大出版 平成十六年刊

鹿児島県・鹿児島大学付属図書館HP

(純心大学古文書研究会会員)

事役を命じたのを嚆矢とするが、それ以降唐通事の人員が増え、職制が細かく整えられると同時に身分格差が激しくなって、唐人家系の重視と世襲制度が確立していった。

後で述べる岡嶋冠山は唐内通事であったが「内通事では飯がくえないので辞めさせてほしい」と、会所を通じ奉行所へ願い出ている。
唐話とは一般的に言って中国語全体を指すが、ここでは主に、話し言葉としての唐話にふれたい。日常会話は唐通事の独壇場であった。世襲制度であれば一子相伝の形で引き継がれたであろう。となると唐話は通事の世界に閉じこもってしまったのか…といえ、そうでもない。日本人通事の有志が私塾を開いて教えることもあったし、明和五年(二七六八)鹿児島藩稽古通事の鮫島正次郎は、藩命によって長崎に赴き、西中町の呉南溪を師匠として語学力をみがいている。唐寺の僧侶も個人的に唐話を教えていた。十代頃の岡嶋冠山も私塾で教えを受けた一人で、後に彼は唐話を京、大坂、江戸を中心に広げようと考えた。

岡嶋冠山については、長崎大学名誉教授・若木太一氏の講話と共著『辞書遊歩』の内容から多くの教示を受けた。この一文をまとめるに当たり援用させて頂いたことを、まずお断りしておきたい。

二 岡嶋冠山はどんな人物

初めに彼の年譜について大まかにふれる。
延宝元年(二六七二) この年長崎にて誕生か。
貞享四年(二六八七) 十五歳。この頃南京稽古通事見習か。上野玄貞、唐人の王庶常について唐話を学ぶか。上野玄貞が後に興福寺下に開いた私塾の門弟にいたという。
元禄五年(二六九二) 二十歳。萩侯・毛利吉就に訳士として仕えたいらしい。
元禄七年(二六九四) 二二歳。役を退いて長崎へ帰郷し、南京内通事として唐通事会所に属し働いていたか。
元禄十四年(二七〇一) 二九歳。南京内通事職を辞したいと、会所を通じ立山奉行所へ申し出る。理由は「生活が逼迫して渡世困難、他国へ出

風信

○七月十七日、高原啓子女史来訪。二十二日は朝九時三六分より長崎で九二・九%の日食が始まるので「皆で観察するように」と日蝕観察用眼鏡を届けて下さった。

○七月二十二日・日蝕の日。三〇年にわたり毎年長崎学研修を実施され、昨年は長崎市長より感謝状が贈られた名古屋市の椋山女学園中村東雄先生他来訪あり。「今年も十一月に長崎研修をするので」其の下準備のため来崎されたとの事。本会より講師として山口広助・餅田健両名他四名の方々に依頼があった。

○長崎の八月は盆の墓掃除に始まり、原爆忌、精霊流し、飴屋の幽霊、中国盆(崇福寺)と続いた。

○お盆の語源を聞いてこられた。お盆の語源はサンスクリット語の Ullam Bana であり、其の意味は「さかさに吊す」とある。この言葉より「吊され苦しむ人を救う」の意に転じ、更に目蓮尊者が餓鬼道で苦しむ母親を救う物語(盂蘭盆経)になったと説明してある。

○さて、それでは、お盆を旧七月十五日と定めた理由はと言われる。それは、インドでは六・七月は雨期であり屋外の仕事は休み、静かに寺で修行に励む習慣があったので、其の間を利用して盆行に専念したと言う。

○先日、大仁田厚氏に誘われ「島原たべ歩き」に同行させて戴いた。先ずは島原名物の「白玉だんご」、次に「六べえ」・「具雑煮」をいただき、最後に武家屋敷では抹茶をいただいた。全てこの島原の地には、綺麗な湧き水に支えられた食の文化がある事を教えられた。

○その翌日、食の文化史研究者として著名な松下幸子先生より、美しい江戸の錦絵を背景に江戸趣味の料理を編輯された「錦絵が語る江戸の食」を贈っていただいた。本書の「まえがき」を読むと「本書の研究は二〇〇一年三月に始まった江戸食文化紀行を基礎として構成し本年発刊に至った」と記してあった。内容は江戸の美しい版画にあわせて正月・雑祭・花見・芝居見物などと、江戸の美味とされる初鰯、江戸前すし、天ぷら、蒲焼等々が取りあげてあり、実に楽しく読ませて戴いた。(遊子館刊・二、八〇〇十税)

○本会で十一月に予定しておりました恒例の中国研修旅行・顧問の越中先生が健康上の事で不参加となられましたので中止する事になりました。御連絡申しあげます。

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 2F

